

聖書：マタイ 17：22～27

説教題：つまずかせないために

日時：2019年11月10日（朝拝）

今日の箇所はイエス様の2回目の受難予告から始まります。1回目は16章21節に記されました。それはペテロのあの有名な信仰告白の直後に語られました。「あなたは生ける神の子キリストです」という彼の告白をきっかけとしてイエス様は、ではキリストとは何を意味するか、をそこから語り始められました。それに続く2回目の受難予告が22～23節にあります。イエス様は再び言われました。「人の子は、人々の手に渡されようとしています。人の子は彼らに殺されるが、三日目によみがえります。」1回目の時はペテロがイエス様を脇に連れて行っていさめました。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」その彼にイエス様は厳しくこう言われました。「下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」弟子たちは今日の箇所と同じようなことはしていません。むしろ彼らは繰り返してこのように語るイエス様の言葉を聞いて「たいへん悲しんだ」と記されています。彼らにとってこれは本当に聞きたくない言葉、考えたくない言葉、受け止めたくない言葉でした。なのにイエス様がまたこう仰る。前回同様、ここでも最後に3日目のよみがえりのことが触れられてはいますが、弟子たちの思いはその前の部分に集中していたのでしょうか。どうしてイエス様が人々の手に渡されるようなことになってしまうのか。どうして彼らに殺されるというような出来事が生じてしまうのか。彼らは重苦しい空気に包まれるばかりでした。

さて、このように語られたイエス様をどのような目で見るとすべきかについて24節以降のエピソードが光を与えてくれます。イエス様の一行はカペナウムに戻って来ます。ちょうど町の門に来た頃でしょうか。神殿税を集める人たちがペテロのところに来て言います。「あなたがたの先生は神殿税を納めないのですか。」この神殿税とはエルサレム神殿維持のためにユダヤ人の成人男子が納める税金のようなものでした。24節の「神殿税」という部分には印がついていて、欄外を見ると直訳は「二ドラクマ」と書かれています。続いて「ギリシア銀貨の1ドラクマはローマ銀貨の1デナリに相当し、当時の一日分の労賃に当たる」と説明されています。ですから一日の労賃を計算しやすいように今日の1万円とすると2ドラクマは2万円となります。1年間約2万円を納めることになっていたわけです。イエス様はこれまで異邦人の地にいましたので、これを払って

ない状態にあったのかもしれませんが。あるいはイエス様は当時の宗教的慣例とは異なる立場をたびたび示されましたので、神殿税を集める人たちはイエス様は果たしてこれを払ってくれるのかどうか心配になって聞いただけかもしれませんが。それに対してペテロは「納めます」と答えて家の中に入ります。そんなペテロにイエス様の方から語りかけた内容が今日の箇所を中心です。『シモン、あなたはどう思いますか。地上の王たちはだれから税や貢ぎ物を取りますか。自分の子たちからですか、それとも、ほかの人たちからですか。』ペテロが『ほかの人たちからです』と言うと、イエスは言われた。『ですから、子たちにはその義務がないのです。』

ここでイエス様が言わんとしたことは何でしょうか。先に答えから申し上げますと、それは「ご自身は神の子であるから神殿税を払う義務はない」ということです。地上の王様は税や貢物を自分の子どもたちからではなく、他の人たちから取り立てます。王様の子どもはそれらを払う側ではなく、受ける側にいます。神殿税もこれと同じように考えることができます。ここで問題にされている神殿は神の宮、神の家です。とするなら神の子であられるイエス様はこれを払う必要がない。これはイエス様についての驚くべき主張です。イエス様は見た目には他のユダヤ人、また人間たちと何ら変わらない人のように見えますが、本質はそうではない。この方は神の永遠の一人子、聖なる神の独特の御子なる方である。だから神殿税を納める義務はないのです。この「義務がない」という言葉は「自由である」という意味の言葉です。イエス様はこのような規定には縛られない、その上にある「自由」を持つ神の御子なる方なのです。

ではこのことに基づいてイエス様はわたしは神殿税を払わないとされたのでしょうか。そうではありませんでした！イエス様は続く 27 節で「しかし、あの人たちをつまずかせないために」神殿税を納めよう！と言っています。私たちはこれをどう見るべきでしょうか。ある人はこれを妥協と見るかもしれません。神殿税を払う必要がないなら、それは払わないという立場を固守するのが本当ではないのか。明確にその権利を主張して崩さないでいるべきではないのか。状況によって変えるのは優柔不断なのではないかと。しかしそうではありません。イエス様は確かにこれを払わなくて良い立場におられます。その義務はありません。そのことから自由です。なのにイエス様はそれをしようとしておられる。なぜでしょう。それは「あの人たちをつまずかせないため」ということです。今日の説教題はここから取りましたように、ここが今日の箇所が一番重要なところです。このイエス様の言葉が示していることは何でしょうか。それはイエス様は他者の益を考

慮して、ご自分が持っている自由や権利に進んで制限を加えておられるということです。イエス様は聖なる神の御子として神殿税など払う必要はないのです。払うほうがおかしいのです。しかしだからと言って、その在り方をここで貫いたらどうなるでしょうか。それはただ人々に戸惑いと混乱を与えるだけです。この結果、神殿税を集める人々が上の人々から叱られることになるかもしれない。またこの税を集める人たち自身、なぜイエスという人はこうなのかと疑問を抱いて、ここでつまずいてしまうかもしれない。キリスト教福音に心を閉ざしてしまうかもしれない。ここで彼らにご自身は神の御子だから神殿税を払うことは理にかなっていないと主張したところで、彼らに理解してもらうことは困難です。そこでイエス様は今は払った方が良かったのです。払っても別に罪を犯すことにはなりません。それをしない自由をイエス様は持っておられるのですが、必要な障害を除くために彼らに言わば合わせているのです。本来のあり方からすればおかしいことではあるのですが、人々の救いのために、ご自分の神の子としての権利を主張せず、それを後ろに引っ込めて、この低い立場を甘んじてお受け入れなさっているのです。

果たして私たちがイエス様の立場にあったらどうかと考えてみたいと思います。自分が神の子で納税義務のない者だったら、このような道を選び取るでしょうか。自分の生活を振り返ると、私たちはむしろいつも自分の権利を主張しているのではないかと思わされます。私たちの関心は常に「自分は何をして良いか」「何をやる権利があるか」「何をやる自由があるか」、そのことで占められていて、他の人がどう思おうとこれは私の権利だ、私の自由に属することだ、私が楽しんで良いことだと考えて、それを行使しようとする。そしてそれが邪魔されたり、少しでも侵害されたりすると、不当だ！侮辱だ！と大声をあげて怒る。しかしイエス様はここでご自分が持っている特権や栄光、立場を脇に置いておられます。言い換えればご自分を「無」としています。自己主張していません。ご自身が持っている「自由」を他の人々の益に仕えるために用いています。そう見る時、この27節のイエス様のお姿は、先に見た22～23節のイエス様の生き方と全く一つにつながっていることが分かって来るのではないのでしょうか。神の御子なるイエス様にとって、人々の手に渡され、その後で殺されるという扱いは全くふさわしくないものです。それはイエス様ご自身のこととして考えれば必要のないものです。しかしイエス様は私たちの救いのために、ご自分を低くして、実に十字架の死にまでもご自分をささげようとしておられます。そのお姿がこの神殿税のエピソードにおけるイエス様の振舞いとぴったり一致しています。イエス様は払う必要がないのに払おうとしています。

ご自分の権利や自由を主張なさらず、むしろ他者に仕えるために、それを用いておられます。その驚くべき神の子のへりくだりと愛あるお姿を私たちはここに認めるべきではないでしょうか。

イエス様は最後にペテロにどうやってお金を手に入れるべきか、その方法を指示しています。これは何とも不思議な方法です。「湖に行って釣り糸を垂れ、最初に釣れた魚を取りなさい。その口を開けるとスタテル銀貨一枚が見つかります。それを取って、わたしとあなたの分として納めなさい。」と言われます。果たしてこんなことが本当に起こるのでしょうか。まず魚の口に銀貨が入っているということ自体、ちょっと考えにくいことです。おそらくこの時、魚は水の中で光るものを見つけて、それを餌と思って飲み込み、口に入れた状態だったのでしょう。その魚がちょうどペテロが垂れた釣り糸に引っかかるというのも不思議です。タイミングが良過ぎです。そしてその魚の口から取れるコインがスタテル銀貨 1 枚とあります。スタテルという言葉には印がついていて、欄外の 27 を見ると「ギリシア銀貨の 1 スタテルはユダヤ銀貨の 1 シェケルに相当。二人分の神殿税に相当」と注釈されています。ですからこれは 2 ドラクマ×2 の 4 ドラクマに当たり、イエス様とペテロの二人分ぴったりです。ここにイエス様が驚くべき神の御子であることがまた別の仕方で証しされています。ここにおられた方はそのようなお方です。その方がこれを神殿税として納めよ！と言っています。服さなくても良いはずの規定に服しています。それは人々をつまづかせないためです。このことに関わりのある人々がやがてイエス様が提供する救いに心開くようになるためです。彼らの心がやがて神の国へと勝ち取られる可能性を残すためなのです。

果たして私たちの歩みは今日の箇所のイエス様のお姿を前にしてどうでしょうか。私たちはともすると、自分の権利、自分の特権、自分の自由ということばかりを考えて行動しがちかもしれません。他の人が何と言おうと、これは私が勝ち取った権利である。これは私の自由に属することである。私は他の人に咎められず、このように生きて良いのだと。しかしそれとは違うもう一つの生き方があることを、私たちは今日のイエス様のお姿に見ます。それはその権利を用いない生き方です。他者につまづきを与える可能性があるなら、喜んでそれを制限する生き方です。罪を犯すことは避けなければなりません、そうでない限り進んで相手に合わせる生き方です。そうしてその人がいくらかでも福音に心を開くようになり、神の救いにあずかる人となるようにと心を用いる生き方です。このことを考える時、パウロの手紙の有名な言葉がいくつか思い起こされるの

ではないでしょうか。最後にそれらをいくつか開いてみたいと思います。

まず I コリント 8 章 13 節：「ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません。」パウロ個人としては肉を食べることは全然問題ではありません。これを与えてくださった神を見上げて感謝して食べることは良いことだと知っています。しかしもしこれを食べてはならないと思っている人がいるなら、私は今後一切肉を食べないとパウロは言っています。なぜならそういう状況で肉を食べることは周りにいる人々につまずきを与えることになるからです。別に肉を食べなくても罪を犯すわけではありません。そこでパウロは喜んで自分の権利を用いずに、他者の救いのために仕える道を行くと言っています。9 章 12 節：「ほかの人々があなたがたに対する権利にあずかっているのなら、私たちは、なおさらそうではありませんか。それなのに、私たちはこの権利を用いませんでした。むしろ、キリストの福音に対し何の妨げにもならないように、すべてのことを耐え忍んでいます。」働き人は当然報酬を受け取って良いということをパウロはここで述べています。主イエス様もそのように定めておられると彼は言っています。しかしもしこのことが妨げになるなら、私はその権利さえも行使しないと述べています。当然要求できる権利を私は放棄する。周りの人々のつまずきになるのなら、と。22：「弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。」これはまさに今日の箇所にも示されているイエス様の一貫したお姿から、パウロが学び、実践したことだったのではないのでしょうか。

2 回目の主の受難予告を聞いて弟子たちは「たいへん悲しんだ」とありました。私たちもそこにいたら、きっと弟子たちと同じような反応を示したに違いないと思います。できればこんな話は聞きたくない。こんな話は耳に入れたくない。聞かなかったことにしたい。今日の私たちもこの箇所を読んで、ここはさっと読み飛ばしてしまいたい。このような暗い箇所にくっくりとどまっていたくないと思うかもしれません。しかしここはあまり心に留める必要のない箇所ではありません。ここにあるのは神の子であられるお方がご自分の権利を何一つ主張せず、私たちの救いのために喜んでそれを後ろに回して仕えようとしてくださっている姿です。もっと別の生き方をする自由を持っている方が、私たちの益を心にかけてくださるあまり、進んでご自分を低め、いのちまでもささげる歩みにおいて、ご自分が持つ自由を発揮しようとしておられる姿です。私たちはそ

のイエス様のお姿をここに見て今朝、心から感謝の礼拝をささげたいと思います。このイエス様のへりくだりの愛と尊い犠牲によって救いを頂いた私たちです。そのイエス様に感謝している者として、私たちもイエス様にならう歩みへ進みたい。自分は何をして良いか、どんな権利があるか、とばかり考えて他者を顧みない生活ではなく、他者をつまずかせないために、むしろ人々の益となるために、喜んで自分の自由を制限し、その権利を用い過ぎないようにすること。そのようにできる人こそ真の自由を持っている人、また真の自由に生きている人です。その歩みに私たちの主への感謝を現しつつ、その生き方を通して主の御国を宣べ広めて行く歩みへ導かれたいと思います。